

『オトタチバナヒメ伝承』

内藤 浩誉

ヤマトタケルや源頼朝などの「東国」に由縁がある人物を主人公にする伝説を調査し、文学と民俗の観点から考察してきた著者が、オトタチバナヒメ伝承の全体を把握することを目的に、記載ならびに口承文芸、および現地採訪調査を基に文学・伝説の両面から考察する新刊である。書籍表題には「オトタチバナヒメ」を冠するが、表裏一体として語られる「ヤマトタケル」の伝承も含んでおり、調査を重ねて収集した事例を多彩に収録する。

まず、全体を俯瞰するため、以下に目次を紹介する。

- 序章 本書の目的と概容
- 一 目的と視点
 - 二 本書の概容
- 第一部 伝説をいかに捉えるか

第一章 柳田国男の伝説研究

- 一 「伝説」を中心として―
- 二 柳田国男の伝説研究
- 三 伝説を信じるということ

第二章 折口信夫の伝説研究

- 一 「愛護若」を中心として―
- 二 雑誌「土俗と伝説」に見る「伝説」
- 三 愛護若の研究
- 三 伝説の把握

まとめ

第二部 弟橘媛入水譚を考える

第一章 「古事記」弟橘比売命入水譚研究史

- 一 話の背景に関する研究
- 二 話の内容に関する研究
- 三 話の形成に関する研究

まとめ

第二章 「古事記」弟橘比売命入水譚

- 一 「走水の海」を考える―
- 二 入水譚の舞台「走水の海」
- 二 弟橘比売命入水譚の形成

第三章 「古事記」弟橘比売命入水譚

- 一 海難説話を視点に据えて―

一 海難説話との比較

二 弟橘比売命の愛と援助

第四章 「常陸国風土記」の倭武天皇と

- 一 大橋比売命伝承

― 行方郡相鹿・大生里条を中心として―

一 倭武天皇と大橋比売命

二 話の意味と形成

まとめ

第五章 中世における日本武尊水難の話

- 一 「神明鏡」における日本武尊水難の話

二 古代の海難事件

三 高僧伝に見える海難説話

四 現代のオトタチバナヒメ伝説

― 結びに代えて

第三部 オトタチバナヒメ伝説を考える

第一章 オトタチバナヒメ伝説の分類

- 一 オトタチバナヒメ伝説の分類
- 二 遺骸漂着伝承の考察
- 三 遺物漂着伝承の考察

- 四 オトタチバナヒメとなった経緯
- 五 神奈川横須賀市走水のヤマトタケルとオトタチバナヒメ伝説
- 六 走水のオトタチバナヒメ伝説

第二章 オトタチバナヒメ伝説の分布

- 一 オトタチバナヒメ伝説の広がり
- 二 分布域の形成
- 三 受容に際しての民俗的基盤

- 一 東京都に鎮座するオトタチバナヒメを祀る神社の伝承
- 二 神奈川県・千葉県に鎮座するオトタチバナヒメを祀る神社

第三章 オトタチバナヒメ伝説と祭り

- 一 千葉県富津市西大和田吾妻― 神社例大祭を事例として―
- 二 祭りの伝承基盤
- 三 祭りと伝説

- 一 第一部「伝説をいかに捉えるか」
- 二 第二部「弟橘媛入水譚を考える」
- 三 第三部「オトタチバナヒメ伝説を考える」

第四章 船大工が伝えるオトタチバナヒメ

- 一 埼玉県寄居町末野の船下ろし儀礼をめぐって―
- 二 末野の船下ろし
- 二 人形を流す意味
- 三 船大工が伝えるオトタチバナヒメ

※各章冒頭にはそれぞれ「問題の所在」を、また、書籍末尾に参考文献、初出一覧、事項索引を附す。

第一部では、自身のオトタチバナヒメ伝承の研究に向けた整理として伝説の捉え方を再確認すべく、柳田国男・折口信夫といった先学二人の伝説研究に関する取り組みについて著作を比較、伝説の変遷について、前者は社会事情を、後者は文芸の影響を背景に捉えている点を踏まえ、学史の見直しを行う。柳田国男は日本の伝承研究を進展させるにあたり伝説を「コト」として認識し、その特徴は「人が信じる」「必ず記念物がある」「説き明かすのに定まった形が無い」の三点であると指摘したことは周知のことであるが、柳田が「信じる」を伝説の特徴の第一に挙げた上で古代人のものの見方を探ろうとし、「古代の伝説」に辿り着くために伝説の変化の在り方を押さえようとした点を指摘する。続いて、折口信夫による「愛護若」研究を軸とする論考を整理し、折口が行った伝説研究に対する再評価を提案する。

第二部では、ヤマトタケル東征譚におけるオトタチバナヒメの入水譚について先行研究を整理した上で、話の背景・内容・形成を把握しようとする。そして、話の舞台

「走水」に焦点を当て、話の意味を、大和政権における東国経営確立を象徴的に示すという「歴史的側面」、激しい潮流が引き起す海難に直面しての犠牲は勅命実行を優先した故であり、語りは朝廷支配を強化するための誇示であると捉えられんとする

「自然環境的側面」「海を支配する」「渡の神」への投供の習俗が見いだせる「信仰的側面」に整理する。また話の形成に関しては、「他界からきた女性が巡行する男性を守護し、役割を果たした後に元の世界へ戻る」という形式を背景に推察、さらに、海難説話の視座に立った典型例との比較および話の意味と特徴を捉える。すなわち、海難説話に「道中の主人公の海難遭遇」「同行者の助言」「危難の克服」といった三点の「道行き」の形式を見出し、海難についての実際の記録や体験を記す古文書と照会しつつ説話の形成を辿る。ヤマトタケルおよびオトタチバナヒメの人物像、英雄物語における女性の「愛と援助」の描写における編者の意図を読み解き、かつ『常陸国風土記』の倭武天皇と大橋比売命伝承、中世の史書

『神明鏡』と記紀神話のヤマトタケル海難説話の相違を通じ、話の受容を論じる。

第三部では、『古事記』『日本書記』など本拠に見えない伝承事例も含め、関東中心に形跡を残すオトタチバナヒメ伝説を「遺骸漂着伝承」「遺物漂着伝承」「その他」に分類、漂着物をオトタチバナヒメの物として祀る神社が多数存在すると紹介し、櫛や衣(袖)をはじめとする遺物を靈魂観に基づく習俗・呪術から読み解く。そして祭礼起源、船大工の儀礼に則った事例と併せて、地域での受容と話の形成、分布状況とその広がりの意味を探る。

まず、全体の印象として言えるのは、本書構成の問題になるであろうが、序章と終章、本文ともに内容・文章で要点を繰り返して説明する傾向は丁寧なまとめようとする姿勢であり好ましくはあるが、重複が多きかくどさを感じたことは否めない。

また、一部説明に違和感があったのは、第二部における「物語に関して、背景から

捉えていく方法がある。すなわち、『できごと(事件)』は、登場人物、時、場所といった「背景」に基づいて展開すると考えて、そうした背景に焦点をあてて読み解いていく方法である(七三頁、その他)という一文である。できごと(事件)の「登場人物」「時」「場所」は事件を構成する上の要素であって、背景そのものではない。もちろん、「登場人物」「時」「場所」それぞれが有する背景に着目することは必要かつ重要だが、本書に記述されている表現では誤解を招くのではという懸念がある。

さらに、認識と表現という点においては、「弟橘媛入水譚の研究史」を整理する段で、吉井巖氏の論文を紹介しながら「弟橘比売命は自らの意志で入水し、主体性を持つ。当時としては、きわだった新しさがうかがえるという」と引用し、終章でも「自ら自分の進むべき道を選択したことから、主体性ある女性だと捉え、ここに新しい女性像が造形されていると述べている」とまとめている。しかし、これに対する異論を是非読んでみたかった。確かにオトタチバナヒ

メには主体性が認められるが、それが即ち「新しい女性像」になるのであるか。「歴史的に女性は男性に従属してきた」という

紋切り型なイメージに囚われた印象が拭えない。女性史研究が進捗する中で、古代女性の社会的地位が再検討され、それが決して低いものではなく、古代女性が男性から自立し主体的であったとされている(注)。オトタチバナヒメに反映された女性像が以前や同時代の他の女性に比べ「新しい」とするならば、何に対する「新しさ」であるのか、すなわちオトタチバナヒメ以前/以外の旧態を示す根拠が求められるのではないだろうか。そうした意義においては、吉井氏以降の女性史研究を見直すべきと考えられる。古代の女性実像は、もしかしたら「オトタチバナヒメ」からも探りえる問題であるかもしれない。であるならば、新たな観点における探究は可能性を大いに広げられるであろう。最新の女性史研究を踏まえ丁寧な再検討と根拠を示した上で、オトタチバナヒメ像の具体的な解釈を望むものである。さらに加えると、『筑前国風土記逸文』

を『筑前国風土記』と記載しているが、厳密な表記が望ましいであろう。

『古事記』『日本書記』記載のヤマトタケル東征譚に表れるオトタチバナヒメ入水譚は、人身御供の他に、貴種流離譚、東征説話、海難説話、夫婦巡行伝承、地名起源説、うつば舟伝承など、話の展開において興味深い要素が多く取り込まれている。これらに基づき各地で伝承されるオトタチバナヒメ伝説を網羅的に調査し、事例を具体的に分類、多岐にわたり研究の整理を行い、系統立てて捉えようとする本書からは多くを学ぶことができるであろう。オトタチバナヒメは女性伝説の代表的人物の一人で、人物の性格や出自の位置づけはその特性を捉える際に鍵となる。加えて、多くの人物やテーマで取り上げられてきた女性伝説の課題として常に挙げられる「水辺との関係性」でも様々な示唆に富むので、オトタチバナヒメ伝説は研究史にとっても重要な題材と位置づけられよう。

ほしかったいくつかの観点があるので、今後の継続調査に期待し述べたい。

まず「海上安全をもたらそう」という意味からオトタチバナヒメ遺骸漂着伝承を語る「事象」(二一四頁)と推論するが、対して水死体に海からの豊饒を祈願するという風習は一般例として紹介するものの、実際にオトタチバナヒメのものとして祀ったり話を結びつける遺骸漂着伝承の事例はないのであるか。また、漂着物に基づく多数の伝説が神社に關与することは理解できたが、伝説の三大特徴として挙げられる「事物」つまりオトタチバナヒメの遺物が今も現存するのかどうか、現状や、各地域各時代、殊に現代でそれらが信仰の対象として地域社会に位置付けられたり、一定の役割・機能を果たしているのか、ということについて報告を待ちたい。

さらに、近代以降オトタチバナヒメを記念する石碑造立の経緯は興味深い、同様にあつたと推測する江戸時代前期のオトタチバナヒメ入水譚の評価および顕彰の機運の高まり(三三八頁)に対する具体的な様相や

経緯をさらに提示されると、さらに研究に

深みが増すのではなからうか。資料提示の上で、近代との比較や考察を読みたかった。

伝説は単なる歴史に基づく空想の所産に

は留まらない。その意味で船大工が管掌する儀礼と伝説の関与、祭礼と伝説との関連性について調査を重ねた究明が興味深い。埼玉県寄居町末野は特異な事例のようであるが、それ以外の事例、進水式におけるオトタチバナヒメが登場する事例とそうでない事例との相違なども、今後期待したい課題である。

その地で伝説がどのように生きてきたのか。人々に求められ生かされてきた伝説が今もなおどのような形で存在するのか。そして伝説は人々を如何に活かすのか。評者も永年伝説の調査を重ねる中で、歴史を超えて、伝説がひとりで動き出すことがありと感じている。伝説が土地の求めに応じ変化をするだけでなく、土地の人々に働きかけ、会話をするように生き生きとその存在感を放つのである。実生活で船を操る人が注意喚起のために伝説を認識するといっ

た報告は、まさに伝説が現実に益をもた

らすものといえ、生活に地域に人々に生かされた、あるいは地域を活かす伝説に値す

二〇二〇年六月 岩田書院刊
本体八四〇〇円
(ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師)

物語を読み解くにはその地域の地理的特性、歴史性、特有性に注目することが大切である。生活者たちの実際の体験が文芸に反映されてきたと思われるからである。具体的な様相を通じ、海辺の人々の実践と認識(信仰)を知ることが、難所に対する意識を感受することにつながるだろう。人が危難をどのように捉え、いかに回避しようと考えたのか。伝説の内容と人々の向き合い方から考察することは大変意義深いものである。そうした観点からも、「オトタチバナヒメ伝承」は、実は我々にとって親近感を持つべき事象なのだ気づかされた。

(注) 例えば、網野善彦『女性の社会的地位再考』(神奈川大学評論ブックレット、御茶の水書房、一九九九)は女性に対する男性支配の見解を研究史として簡潔にまとめている。

書評

廣田收著

『民間説話と『宇治拾遺物語』』

花部 英雄

本書は国文学(文献)研究者から口承文芸研究者に向けて突きつけられた課題とい

える。口承、書承を問わずテキストである

対照軸としての昔話、昔話研究―

第一章 『風土記』の在地神話と昔話、そして中世説話

第二章 昔話の類型と語り―昔話「鳥吞爺」と唱え言をめぐって―

第二章 『宇治拾遺物語』第一九話「清徳聖妻奇特事」考

話分析の方法」は、これまでになかったし、

第三章 昔話と説話分析

第三章 『宇治拾遺物語』新羅国后考

今後このような問題意識で研究する人も出てこないかもしれないので、ここではその

第一節 昔話「瘤取爺」の日韓比較研究―日本昔話の特質はどこに認められるのか―

第五章 『今昔物語集』との同一説話考

方法の当否を見定めておく必要がある。おそらく五九〇ページにわたるこの書物を読

第二節 昔話と唱え言・昔話の唱え言―話型と伝承的表現―

第二節 『宇治拾遺物語』佐多事考

了する口承文芸研究者は数えるほどであろうから、ていねいな本書の紹介を心がけた

第三節 『韓国口碑文学大系』の採録と語り―日本笑話「和尚と小僧」との比較をめぐって―

第六章 文学史としての『宇治拾遺物語』

い。

第四節 『韓国口碑文学大系』の口碑「新房のぞき見」の話型―日本説話との比較をめぐって―

都合十六本の論考が収録されているが、ここでは第四章「宇治拾遺物語」孤立話考」および第五章「今昔物語集」との同一説話考」にある論考は、純粹に説話の研究であり、口承文芸研究との関連が薄いので、ここでは割愛して、口承文芸にかかわ

内容を、目次の章節で示しておきたい。

序章 文献説話の話型と表現の歴史性―

序章 文献説話の話型と表現の歴史性―

序章 文献説話の話型と表現の歴史性―

序章 文献説話の話型と表現の歴史性―